

総合日本語コース報告（2010年10月～2011年9月）

濱田美和

1 はじめに

総合日本語コースは、日本語・日本文化研修留学生のために、2004年10月に新設した日本語プログラムである。富山大学の外国人留学生全体の中で、日本語・日本文化研修留学生の占める割合は低いいため、本コースの授業科目はいずれも日本語課外補講上級クラスとの合同授業として開講している。2005年9月に、初めて本コースの修了生を送り出し、2010年10月に7期目の学生を迎えた。

以下、2010年度秋期（2010年10月～2011年3月）及び春期（2011年4月～9月）の総合日本語コースの実施状況について報告する。

2 受講学生

「2010年度富山大学日本語・日本文化研修留学生プログラム」に参加した学生は1人で、その学生は秋期、春期ともに総合日本語コースを受講した。学生の出身国はロシアで、所属は人文学部である。なお、2006年10月より、本学との学術交流協定に基づく短期留学生も総合日本語コースに参加可能となったが、短期留学生の受講状況等については別に報告する。（「短期留学生報告」参照）

総合日本語コースの授業科目として、2010年度は秋期と春期、各期9科目を提供した。総合日本語コースの授業科目は必修科目ではないが、本学の日本語・日本文化研修留学生プログラムの修了要件の一つとして、学部や教養教育の授業科目及び総合日本語コースの授業科目の中から各期8科目以上の履修が義務づけられている。

2010年度の日本語・日本文化研修留学生の総合日本語コースの受講状況は、10科目（秋期5、春期5）だった。

3 担当者

秋期、春期ともに、1人のセンター専任教員（濱田美和）、及び、6人の謝金講師（遠藤祥子、高島智美、中河和子、藤田佐和子、松岡裕見子、要門美規）が授業を担当した。いずれの期も、センター専任教員（濱田美和）がコーディネートをを行った。

4 スケジュール

秋期は、2010年10月8日（金）～2011年2月9日（水）を授業期間とした。12月22日（水）～1月3日（月）は冬季休業、1月14日（金）は大学入試センター試験準備日のため、休講とした。また、曜日調整のため、1月11日（火）は月曜日の授業を行った。

春期は、2011年4月11日（月）～7月29日（金）を授業期間とした。

学期ごとに、コーディネーターがオリエンテーションを行った。オリエンテーションの実施日は、秋期は2010年10月4日（月）、春期は2011年4月6日（水）である。オリエンテーションでは、学生に各授業科目の目的、理解達成目標、授業計画等を掲載した授業概要の冊子（授業概要は留学生センターホームページ上にも掲載、Web版は日本語、英語、中国語の3言語での閲覧が可能）を渡し、コースの内容、各授業科目の詳細について説明を行った。春期のオリエンテーションでは、履修の際の参考となるよう、秋期の学業成績通知書を学生に渡している。履修登録は、授業開始後1週間以内に行い、履修登録を行った授業科目について学期終了時に成績を出すシステムとしている。

5 授業内容

総合日本語コースは、上級レベルの日本語課外補講の授業と合同で授業を行っているが、日本語課外補講は成績評価が必要でないため、授業科目によっては必要に応じ、総合日本語コースの受講者だけに別課題や試験を課すなどの方法を取っている。科目別の授業概要は表1の通りである。

表1 総合日本語コース授業概要（2010年10月～2011年9月）

授業科目名 (開講曜限)	担当	授業概要
秋期：読解A 2 春期：読解A 1 (火曜4限)	藤田	日本人向けに書かれた文章の読解を通して、大学での学習や研究に必要なとされる実践的な日本語読解能力を身につける。主教材として『生きた素材で学ぶ 中級から上級への日本語』(The Japan Times)を使用し、秋期は奇数ユニット、春期は偶数ユニットを学ぶ。この他、適宜テーマに合った生教材も取り入れ、中上級の表現、文法、語彙を習得する。
秋期：読解B 2 (水曜2限) 春期：読解B 1 (金曜2限)	遠藤	大学生活で出会う様々なテキストタイプの読み物を扱い、それぞれのタイプの読み物の特徴となる基本的な構造、文体等を把握し、それに慣れる手だてを見つける。特に留学生にとって必要な専門書、論文、教養書を読み解く技能を多面的に養うとともに、ブックレポートの際の基本的技術をマスターする。
秋期：文法 2 (水曜1限) 春期：文法 1 (木曜4限)	遠藤 (秋期) 要門 (春期)	大学での学習、研究生活に必要な上級レベルの文法・表現(時を表す表現、接続表現、文末表現など)を、実践的な演習を通して習得する。日本語能力試験受験対策もあわせて行う。
秋期：作文 2 春期：作文 1 (火曜3限)	松岡	論理的な文章を書くために必要な構成、表現、文法の基本を学び、学習した項目を用いてまとめた文章を書くことで、レポートや論文を書く力をつける。文章を書く練習はコンピュータを使って行い、ワープロ文書でのレポート作成方法も同時に学ぶ。
秋期：聴解 2 春期：聴解 1 (木曜3限)	要門	大学で講義を聞いたり、演習や研究会に参加したりする際に必要な聴解力や、日常生活に必要な聴解力を身につけるために、様々な種類の聴解練習を行う。日本語の聴解教材とあわせて、テレビやラジオ、インターネットなど、様々なメディアを用いた練習を行う。
秋期：会話 2 春期：会話 1 (火曜2限)	松岡	ロールプレイ等での会話練習を通して、大学生活や日常生活で出会う場面や状況での会話力を伸ばす。また、人や物、経験など様々なトピックについて日本語で的確に説明・描写する力、意見や感想を述べる力を養う。
秋期：漢字 2 春期：漢字 1 (月曜3限)	高島	日常生活や大学の講義で用いられている漢字・漢字語の意味を理解し、正しく読み、使う力を身につける。学生一人一人のレベルに応じたテキスト(『漢字1000PLUS INTERMEDIATE KANJI BOOK』Vol.1, Vol.2(凡人社)等)を用い、大学での学習、研究生活に必要な漢字を習得する。
秋期：表現技術 2 春期：表現技術 1 (月曜2限)	濱田	目上の人や初対面の人とやりとりする、あるいは、不特定多数の人に対して情報発信する際に必要となる、フォーマルな場で用いられる日本語の表現、日常的・実用的な文章の書き方、日本語での口頭発表のスキルを習得する。
秋期：日本文化 2 春期：日本文化 1 (水曜3限)	中河	留学生として日本社会を分析する試み(情報の読みとり、整理など)をTV番組、新聞・雑誌記事、自治体広報などの様々なメディアを用いてする。日本社会を読み解くための身の回りのリソースを活用する手だてを与え、そこから得たものを日本語で発信する力を養成する。

* 1限 8:45～10:15, 2限 10:30～12:00, 3限 13:00～14:30, 4限 14:45～16:15

いずれの科目も秋期と春期で同一の授業概要（目的）となっているが、秋期に履修した科目を春期に続けて履修できるように、授業で取り上げるトピックやタスクの内容は期ごとに変えている。

なお、学生による授業評価アンケートは、日本語課外補講上級クラスとまとめて実施した。授業評価アンケートの結果については、日本語課外補講報告の7 授業評価を参照いただきたい。

6 成績評価

成績評価の方法については、成績評価の基準を授業概要に明記するとともに、オリエンテーションでも説明している。この基準をもとに授業担当者が、優（80点～100点）、良（70点～79点）、可（60点～69点）、不可（59点以下）で判定を行うが、総合日本語コースの授業科目については単位が出ないことになっている。学生への成績の通知は、9月の日本語・日本文化研修留学生プログラムの修了時に、成績を記した履修証明書の発行を留学生センター長名で行っている。

7 学生からの評価

前述の通り、各授業科目に関する授業評価アンケートは日本語課外補講とまとめて実施し、これ以外に、総合日本語コース全体についてはインタビュー調査（実施日：2011年8月4日（木）、調査対象：2010年度日本語・日本文化研修留学生（1人））を行った。この結果を表2に示す。

表2 総合日本語コース（日本語・日本文化研修留学生）インタビュー調査結果

1. 総合日本語コース：科目について	・十分だったが、秋期は多くとりすぎたので、大変だった。学部の授業が予習もしないといけなかったので、大変だった。春期は学部の授業をとらなかったの、秋期と比べて楽だった。留学生センターの授業はおもしろくて、予習にもそんなに時間がかからなかった。
2. 総合日本語コース：レベルについて	・ちょうど良かった。
3. 自身の日本語力について	・まず日本に来て一番難しかったのは聴解だったので、聴解をとって、聴解のレベルを上達させたいと思った。7月に日本語能力試験を受けたとき、聴解は簡単だった。日本語能力試験では、読解が難しかった。ことばではなく、総合理解が難しかった。似た選択肢の中から答えを選ぶのが難しかった。それから、（留学生センターの授業を受けて、）丁寧語とかもわかるようになった。今メールを書くときは、そんなに大変なことじゃなくなった。
4. 富山での留学生活について	・楽しめた。もう一度来たいぐらい。富山の生活は静かだけど、日本は狭いので、どこでも自由に行くことができるので、静かなところに住んでよかった。自然も食べ物もよくて、うれしい。日本人は礼儀正しくて、親切。もちろんいやなこともあったけど、いやなことは記憶に残らなかった。震災のときも、全然大丈夫だった。国の両親も母国の友人から電話で心配していたが、自分と話した後は、大丈夫だと思ってくれた。日本に来て一番大変なのは人との関係。日本人の態度を見て、どうやって行動したらいいかを考えたらいいと思う。自分を適応させるのが大事。日本では、友達をつくるのが難しい。日本人はなかなか声をかけてくれない。日本人と友達になるのは難しいが、富山大学で日本人の友達を2人作ることができた。〇〇さんとは親友になれた。

コースの日本語の科目やレベルについては適当だったようである。自分自身の日本語力の伸びについては、聞く力を中心に日本語力の伸びを実感していることがわかる。富山での留学生活については、静かに学習に取り組める環境に満足している様子がうかがえる。友人をつくるのには苦勞したようだが、

帰国前には親友と呼べる友人ができたことを大変うれしそうに話していた。

8 おわりに

2010年度秋期、春期は従来通りのカリキュラムで、これまでと同様の科目数で開講することができた。これは、いずれの科目も日本語課外補講上級クラスとの合同授業であることから実現できているが、ここ数年、上級クラスの受講者数が増加傾向にある。これに伴って、受講者の日本語の習熟度の開きが以前よりも顕著になってきた。これにどのように対応していくかが今一番大きな課題と言える。授業内容等の工夫によってある程度の改善はできるが、今後さらに上級クラスの受講者数が増え続けるようであれば、「読解」以外の科目についてもレベル別のクラスを設けるなど新たな対策が必要である。